

# 田辺聖子作品における関西方言について

小 谷 博 泰

はじめに

田辺聖子の小説にはしばしば関西方言（大阪弁、神戸弁、京都弁等の総称）が現れる。関西を舞台とする小説である<sup>(注1)</sup>から、会話に関西弁が現れるのは当然といえるが、しかし、共通語ならともかく、小説のなかで、方言を田辺氏ほどの確に使いこなすのは、並たいていのことではない。特に小説中の恋愛のセリフとしては、かならずしも関西弁の使用は容易ではなさそうである。

田辺聖子自身、次のように書いている。

まず、小説「宇宙人のイモ」の冒頭部分。（以下、資料名は稿の最後に示す）

まさか、榎本に不倫ができようとは思わなかった。

それはもっと、垢ぬけた男のすることや、と思っていたのだ。

それに、不倫は大阪弁でやるものと違<sup>ちや</sup>う、という思いこみがある。テレビドラマもみな標準語というか共通語というか、そういう言葉を操って不倫乱倫、あるいは恋愛シーンを演じているではないか。

もし大阪弁がドラマになるなら、それはホームドラマの世界だけである。

榎本はかたく、そう思いこんでいたのだ。（1. 文春文庫125ページ）

次は、『薔薇の雨』（中公文庫）の永田萌氏の「解説」中に紹介されている田辺氏と永田氏の対話部分である。

「関西育ちだから、よけいそう思うんですが、どうして大阪弁を話す人が、美しい恋物語の主人公になったりできるんでしょう？」

「よお、そう聞かれるワァ」

「わたしは先生の小説を知るまでは、恋を語るのは、美男美女の標準語

をしゃべる人でなきゃいけないと思ってました」

「いろんな人、出てくるもんねエ」

「そうですね。なにしろそれが……」

「大阪弁のおっちゃんやもんねエ」（2. 中公文庫257, 258ページ）

「そやけど大阪弁できれいな恋のお話を書くのは至難の技やねえ。わたしの苦労もわかってね」

「よおくわかります」

笑っているうちに、無事、対談も終わった。（260, 261ページ）

次はエッセー「小説と大阪弁」の部分である。

私が小説を書きはじめた昭和二十年・三十年代は、文壇でも一般社会でも大阪弁は市民権がなく、偏見の風当りは強かった。（中略）ことに〈恋愛小説を大阪弁で書けない〉という声があった。私は不思議でならなかった。大阪の若い者だって恋をする。恋をするときだけ、東京弁（標準語や共通語という言葉が社会に浸透するまでは、大阪人は“東京弁”と呼んでいた）を使うのであろうか。

そう咄嗟に東京弁が出るであろうかとおかしかった。（中略）

（よーし、大阪弁でサガン書いたろ）

と思った。（3. 大阪春秋12ページ）

次は、対談「恋愛小説家の仕事」から引く。

田辺 大阪弁というのは恋愛小説にぴったりなの。私が小説を書き始めた時代は、大阪弁で絶対あかんのが恋愛小説と国会の答弁やと言われてたんです。（中略）

大阪弁というのは細かい心理の<sup>ひだ</sup>襷が表現できるのに、大阪弁で恋愛小説を書けないなんて誰が言ったのかしら。

川上 ただ、田辺さんも書いていらっしやいましたが、大阪の言葉をそのまま書き写すと、それはまた違うものなんですね。

田辺 お手手とお耳のせいなんですよ。耳で聞いてそのとおりに書いてもだめで、手でいろいろと操作しないといけないの。だからその辺の機微を知らない人がお書きになると汚い大阪弁になって、ほんとうの意味は伝わらない。

川上 どの言葉を選ぶかというのは、とても大切だと思います。

田辺 片仮名を使ったり、字を小さくしたり、ちょっと順番を変えてみたり。いろいろなテクニックを使うと、きれいに読める。ぜんぜん大阪弁を知らない人が読んで、「ほんまやほんまや、これ大阪弁やな」と思わせるように書くのが、作家の責任ですからね。(4. 田辺聖子全集201, 202ページ)  
次は、林真理子のエッセー「今夜も思い出し笑い」に対する田辺聖子の「解説」から引用する。

ところで私も、週刊誌見開き二ページを、十五年持って書き続けてきた(昨年、やめた)。(中略)私の場合だと大阪弁になるが、しちむずかしい大阪弁をリアルに書いたんじゃ、読めない。(中略)字づら美・重視の創作大阪弁、という所であった。(5. ちくま文庫305, 306ページ)

この他にも例はあるが、引用が多くなりそうで省略する。

話した言葉をそのまま文字に書いてもうまくいかないのは、共通語の場合にもおおむね言えることで、文法的に無理があったり、主語が不明になったり、話が飛んでしまっていたり、繰り返しが多すぎたり、俗語や発音の崩れのようなものがあつたりして読むに耐えないものとなりがちであろう。

しかし、共通語の場合は、まがりなりにも口語文法を教わっていたり、作文教育を受けてきたり、何より小説などで共通語の会話文を読みなれている。しかし、方言文法の知識や方言による作文教育、方言の会話のある小説などは、いまだ特別なもので、一般的ではない。ふんだんにある創作共通語と違って、「創作大阪弁」の創作については、格別の努力が必要であつたであろう。

田辺聖子の小説といっても、年譜によれば、平成5年に、「東京と関西で作家生活30年と著書200冊を祝う会」が開催されており、著作は短編小説が「ざっと数えて400編以上」<sup>(注2)</sup>という。おびただしい数の作品のうち、本稿筆者が読んだのはそのほんの一部分にすぎない。そのまた、ほんの一部分の小説から抜粋しながら、次にその中の関西弁について述べることとする。

## 1 「感傷旅行」 センチメンタル・ジャーニー

昭和38年作者35歳で発表、次の年に芥川賞を受賞した作品である。主要登場人物2名とその会話の一部分を紹介する。なお引用文は『田辺聖子全集』によ

った。作者が今も、バリバリの現役とあれば、発表時以降の部分的な訂正や書き換えの恐れ、なきにしもあらずで、文の制作年月を言うには、初出、初版などを見つけ出して発表当時の形を確認する書誌学的研究が必要であるが、ここでは全集本なり文庫本なりに収められた段階の資料として、その分析を進めさせていただく。なお、登場人物の紹介には主に本文からの用語・表現を利用させていただいた。(一部分のみを任意に抄出。以下同じ)

森 有以子 (文中では「彼女」とも記される)、コラムニスト。懸賞ドラマに入選し、身の上相談をラジオで引き受けていた。党員の恋人を持つ。「阪神間の高級住宅地で使われる、関西風な柔らかかみを帯びた標準語」で育った。

「あっ！人の名なの？つべこべいわずに、知っているんなら教えてくれたっていいじゃないのさ、それからなんとかいったっけ……弁証法的唯物論とさ、唯物論的弁証法とはどう違うの？」(6. 田辺聖子全集8ページ)

「バカ！そんなことどっちだっていいじゃないのさ、善玉か悪玉かってきいてんのよ」(8ページ)

「つべこべいわずに」「悪玉かかってきいてんのよ」など、上品ならざる表現がまじっていて、高級住宅地出身のお嬢さんらしくない。方言としては大阪弁の「あんた」(別に「ほけなす！」等もある)がまじるが、これも共通語にまじえると言いがきつい。後の田辺氏の小説に現れる、上品な「共通語」と「大阪弁」の両言語をバイリンガルのようにして使い分けられる「ハイミス」たち(たとえば前出の「宇宙のイモ」のキリ子)などと比べると、言葉の使用にたけていない感じはいなめないが、これによって、有以子の、男あるいは男たちから受けた影響や、自堕落な生活ぶりなどを示しているのであろう。

ほく(ヒロシ)、視点人物で、この人物の一人称によって小説が書かれている。大学途中で発病して療養費ほしさに同じ懸賞ドラマに応募しやはり入選、下積みのライターをしている。大阪市の周辺のベッドタウンに住み、肥後橋で仕事の打ち合わせをしたりする。

「勝手にせえ！」(9ページ)

「経験というのは、黨員さんのことかい？」(15ページ)

「おい、ここはほくのうちやで」(33ページ)

「じゃ、話は早いや……もう、ケイでおちつくんだな」(35ページ)

「なあんや，……金をとられてへんのか。なら，ええやないか」(37ページ)

「いや。しかし，悪いことはいえへんさかい，もうええかげんに男遊びはやめたらどうやのん？」(46ページ)

「バカ，夜のだよ——そこへ寝てもいいよ」(47ページ)

同一の相手にたいして，コテコテの関西弁でしゃべっているかと思うと，すぐ次の発話ではコテコテの？共通語の談話ことばに変わったりして，読む方としてはとまどう。関西語話者の本稿筆者には，共通語発話部分がえらくきついように感じられる。

「きみは少々ゲテ趣味やさかい，つまらん男にひっかかって女ささげた，いうだけの話やないか，たいそうにいうやつがあるか，あほ」

ほくは，どんなムードもことがらも，たちまち冷血な卑俗の水をぶっかけて熱をさましてしまう，あの大阪弁の，嘲笑的な明快さを好んでいた。(42ページ)

後の作品にしばしば見られるところだが，大阪弁のことばや表現に対する小説中での解説，あるいは自省がすでに現れているのが知られる。ただし「冷血な卑俗の水」など，後のそれに比べ，いささか生硬な表現ではある。

## 2 『鏡をみてはいけません』

1996年68歳の年に刊行されている。関西弁を使う主要登場人物として，まず，女主人公のお相手である小林律（彼）があげられる。西宮に住んでいる。5年前に妻と離婚し，小学校4年生の息子の宵太と暮らしている。

〈いっそ，うちへ<sup>け</sup>来えへんか，アンタ〉(7.集英社文庫19ページ)

「まえにいっぺん，関東のほうの，ごつつう太い葱をひとにもろたことがあった」(49ページ)

「忘れた。けど長いこと<sup>お</sup>会うてへんかった」(74ページ)

〈ないね。ごちゃごちゃいうな，オマエはうまい朝飯作とれ〉(154ページ)

「ニューヨークでもパリでも行きくされっ」(222ページ)

「けど，オレは，そなんん，ようせん。第一，そなんに大事な仕事，ちゅうもん，もってないし，な，オレ」(252ページ)

「自分の仕事ないよって、せめて、ヒトの仕事、ヘルプしよやないけ」(252ページ)

「来えへん」「まえ」「ごつつう」「もろた」「会うてへん」など、同棲することになった「私」に対し、普段着のざっくばらんな大阪弁を使っている。ただ、「ちゅうもん」や「ないけ」は一般的に使われる表現ではないが、ただし阪神間でも男ことばとして使わないでもない。ただ、阪神間でこれを使った場合は、冗談っぽく軽くいうとか、逆にきつく言うとか、独特のニュアンスをとまなうであろう。「一じゃ」も同様の特別な男ことばとして存在する。「一くされ」は罵倒のことばである。「律」は女主人公の「私」に対し、気楽にぞんざいな関西弁を使っている感じがある。

小説中に律の息子の「宵太」のことばについて、次のような記述がある。

「つきあいは一瞬でも長いとき、あるよ。ほく今日、森さんに逢うてなあ、イエーっと思たがな」

と、気取らない神戸弁だった。(103ページ)

もう少し将来になると「好きくない」とがんばって、私のいうことも諾かなくなるだろうけれど、(268ページ)

小学生の宵太は「イエー」「好きくない」など、若い世代らしいことばを使っている。しかし、「気取らない神戸弁」というより、神戸弁話者である本稿筆者からすると、若い世代の大阪弁あるいは関西共通語というべきものではないかと思われる。もっとも、かぎ括弧の中の、読点の多いしゃべり方が多いのは、あるいは、神戸っぽいしゃべり方と言えるかもしれない。これは、この小説では宵太に限らないが。

「西宮なら近いから、ご町内みたいなもの、とつい気楽に考えて、ご都合もうかがわず、押しかけてしまいました、すみません」(91ページ)

この井上玲は、神戸に住む神戸っ子の画家ということだが、共通語をしゃべっている。これは、話し手同士の対話の関係がヨソイキの関係であって、仲間内の関係とはなっていないことを示している。しかし、酒がまわると、「ほんで春になる」「梅のええ匂いがする」「おちちの匂いやね」「思われへん」というように関西弁がまじるようになる。

なお、この小説には神戸弁をしゃべる「神戸のおばちゃん」と、播州弁をし

やべる「姫路のおばちゃん」が登場する。

まず、神戸のおばちゃんの会話

「染めとうのと違うよ、ほんと、もとから黒いの。自慢できるのん、これだけや」(183ページ)

「染めとう」は「染めとる」の神戸弁である。なお、大阪では女性はふつう「一とる」「一よる」を使わないが、神戸以西では男性も女性も区別なくこれを使う。

「もう三年から塾へ行かして、そのほかに絵やら音楽やらしてやわ」

「音楽やらしてや」の「てや」は、後に述べる播州弁のテヤ敬語と同じものとも思われるが、典型的なテヤ敬語は「一しよってや」「一しとってや」と、「一よる」「一とる」に「てや」が付いた形である。本稿筆者は大阪弁の話者ではないので確かなことが言えないが、「一してや」だと、大阪で使っても違和感を持たれないのではなからうか。他に、次のような言い方をしている。

「ほうか、すんませんなあ、ほな、招まばれよか」(193ページ)

次に姫路のおばちゃん。次のように「つくらはった」と大阪弁式のハル敬語も使う。

「まあ、他人ひと様のつくらはったご飯を、こない美味おいしゅう頂いたんは、はじめて」(193ページ)

だが、次のように播州弁の特徴であるテヤ敬語の「しとってやったら」も使っている。

「お正月のお煮しめも、あんたがしとってやったら、ええ味でございましょうなあ」と播州弁をまじえてほめた。(194ページ)

「おいしいの食べられて幸せ？」

——大阪弁には幸せなんてコトバ、ないのになあ、とわたしは考えてる。

(202ページ)

などと描かれている。

「もうお母アさんも亡くならはったし、小姑さんもみな、おヨメに行って」

(248ページ)

「あのことで橘子さんから連絡する、いうとってでした」(258ページ)

「みんな宵太ちゃんを待とってやさかいな」(259ページ)

「いうとってでした」はテヤ敬語の「や」のかわりに、丁寧な形の「です」

を使ったもの。橘子は律の別れた妻である。「亡くならはったし」とハル敬語がまざるのが不自然にも考えられるが、神戸のおばちゃんとは対照的な「上品な」人柄であるため、丁寧に関西共通語としてのハルを使ったとも、神戸のおばちゃんの家で暮らして、神戸人の影響が出たためとも考えられる。

女主人公の「私（中川野百合）」は、31歳。大阪の天満にマンションを持っている。28歳のときにペンネーム（森ありす）で自分の詩画集を出版したことがある。今は、企画社の契約スタッフをしている。仕事で知りあった律の家に住んでいる。料理が上手で、他の小説でも見られることだが、料理に関する話題を挿入することで、小説の話の展開が進められる部分が少なくない。

「べつに、歌じゃないの、ただ、クセなの、あたしの」（10ページ）

「でも、なぜか、つい、出てくるのね、それに、いろいろな音階、吹けないから、きまったメロディになっちゃう」（11ページ）

「これ、甘い。甘いなかにちょっと塩<sup>しよ</sup>ばさがまじってるの。たべてごらん」（14ページ）

「ようし、じゃ冬になったら、さがしてみようっ」（50ページ）

「だめよ、へんなこと教えちゃ」（56ページ）

このように、たいていは共通語の談話ことばでしゃべっている。だが、

「そんな、大層なもんや、あらへんわ……」

と私はとうとう、ふだんのコトバがころがり出ってしまった。（46ページ）と、ふと関西弁が口をついて出ることがある。感情が強く働いたときで、たとえば怒ったときのセリフ「本人がでていかへん、いうてるのに」など。

なお、これも他の小説でも見られることだが、料理について、関西弁のこぼれ表現を取り上げての説明を補うことで、分かりやすくするとともに、話の展開をはかっている箇所がまじえられている。

大阪では古い言葉に、そういう動作を「エゴエゴする」と表現するんだけどなあ、（184ページ）

たきこみごはんといえば一般的だけど、死んだ母親は大阪風に、いつもかやくごはん、といていた。加薬、と書いたらしいけど、そのほうがずっとおいしそうに聞こえるもの。（193ページ）

——大阪人はわりに「ちゃった」という言葉を愛用するが、もちろん大



阪弁風アクセントで、これは東京の人の使いかたと微妙にちがうだろうなあ、(279ページ)

「ちゃった」を使うのは大阪では女性であり、それもそう多くの人々に及んでいるわけではないと思われる。ただ、田辺聖子のエッセーなどを見ると、田辺氏自身が使っておられる可能性はある。少なくともこの登場人物の職域や交際域では、女性たちが使っていることになる。

なお、田辺聖子は大阪弁に関する次の著書があり、そこで研究家はだしの深い考察を行っておられる。その中で、神戸のことばについては次のように書く。

これには私はおかしい思い出があって、昭和四十年代のはじめ、私が結婚した相手は神戸在住で、家族のうち半分は神戸生れ、神戸育ちであった。この神戸というところは、大阪とは文化習俗言語、コロツとちがう。一口に阪神というけれど、大阪言語圏は<sup>あまがさき</sup>尼崎までで、<sup>む ことがわ</sup>武庫川を渡ると<sup>にしのみや</sup>西宮市以西は、神戸言語圏というより、むしろ、<sup>はりま</sup>播磨言語圏である。

大阪ほど微細にして変幻きわまらない言語文化は育っていないので、その<sup>かんげき</sup>間隙を<sup>さんしょく</sup>標準語が<sup>ふぜい</sup>蚕食しかかっているという風情である。(中略)

だから私の婚家の、神戸の下町でも、方言にない部分はどんどん標準語になっていて、「イッテラッシャイ」が定着していた。(『大阪弁おもしろ草子』)(8. 田辺聖子全集562ページ)

私は神戸へうつり住んで十年あまりであるが、来た当座は私の大阪語(大阪弁というより、おもに名詞)に、家族一同よく笑うのだった。(中略)

言語圏は神戸と大阪だから、会話は差支えないが、名詞が通じない。

病気の子供に、

「おかいさん食べる？」

というと、それはなあに、と聞く。(中略)

神戸ではかわいい小さな子でさえ、

「カユたべる」

などといい、じつに愛想がない。(『大阪弁ちゃらんぽらん』)(9. 中公文庫151～153ページ)

小説では、すでに昭和48年45歳で刊行したものに次の記述がある。

ひとくちに関西弁といっても京都弁は柔媚<sup>じゅうび</sup>で流れるようで、大阪弁は齒

切れよく、神戸弁は田舎くさく品がない。「(「すべてころんで」) (10. 田辺聖子全集67ページ)

神戸弁は悪く書いているようだが、神戸の町や文化に対しては、次のようにあちらこちらで褒めそやしているので、念のためその一部分を紹介しておく。

そういう点で、私は、神戸というのは、ちょっと変っていると思っている。かなり自由な気分と発想があって、まだまだ面白くなりそうな町である。

私は大阪生れだから、大阪もそういう町にしたいのであるが、なぜか、大阪はただいま動脈硬化という感じで、「特色ある地方」にはなりにくい。ここは男尊女卑の牙城<sup>がじょう</sup>だから。(『芋たこ長電話』) (11. 文春文庫247ページ)

神戸は大阪とはまったく異なった文化圏である。神戸に十年住んだが、住めば住むほど住み心地のよい町だった。こんな町は日本のほかにはないのではないか。(『性分でんねん』) (12. ちくま文庫151ページ)

神戸の町のおさというものは、ひとくちでいつくせないが、何より、海風がもろもろの因襲や偏狭・頑迷を吹き払う、オープンなところがあるのだ。陽光さんさんとして明るく、外人がふらりと漂白してきて、そのまま住みつきやすいような、こだわりのないところがある。この町にはフランクな笑顔と、淡泊なやさしみが似合う。人情敦厚というより、アッサリしたあたたかさ、なのだ。この町では威張ったり虚勢を張ったりすることは似合わない。(270ページ)

田辺聖子は、昭和41年に38歳で神戸市兵庫区の開業医師と結婚し、翌年、兵庫区荒田町で夫の家族と同居している。亡くなった先妻の残した大勢の子供たちと暮らすことになったのは、2006年のNHKテレビの連続ドラマによって広く知られたところである。

この経験によって、小説の登場人物に大きな変化が見られたことであろう。田辺聖子のいわゆる「ハイミスもの」では、30代の女性と中高年の妻子ありの男性との男女関係がよく描かれている。その中では、この小説の場合、妻とはすでに離婚しており、夫(というより夫の妹ではあるが)が息子を育て、小説の結末では、離婚した元妻に男ができ、夫の妹も結婚し、その元夫なる男と女主人公とがめでたく結婚にいたるであろう、という展開が見えてきたところで終わっている。

若き日の作者によって、冷たく批判的な目でもって描かれたかに見える「感傷旅行」の森有以子に対し、後の作者の暖かい愛情が、最もそそがれた一人がこの『鏡をみてはいけません』の中川野百合と言えるかもしれない。もっとも、多くの小説で作者は登場人物に暖かい愛情をそそいでおられるように見受けるが、作家論作品論を論じるのがこの拙稿の目的ではないので、それは機会があれば後日に考えたい。

### 3 『ダンスと空想』

『ダンスと空想』は「サンデー毎日」に1980年から1981年にかけて連載された、つまり田辺52歳・53歳の作品であるが、「兵庫タイムス」学芸部(架空の名称か)、北野町、市役所、フラワーロード、国際会館など神戸(この小説ではコーベと片仮名で記される)の三宮界限が舞台となっている。そこで、必然的に大阪弁、神戸弁が取り上げられている。

「あんたが心で思(おも)てはる気」

海野さんは戦災に遭うまで大阪で育った人なので、大阪弁である。コーベ弁には「はる」という敬語がないので、五十近い中年男の海野さんが、  
「……<sup>おも</sup>思てはる」

「……<sup>おも</sup>言いはる」

などという、モッチャリと、からみつくような、やさしい色気が感じられる。コーベ弁はもっと粗放でからっとしている、海野さんの大阪弁はことさら耳につく。

しかしそれは、不快なものではない。(13. 文春文庫67ページ)

神戸における談話表現の実態を踏まえたためか、会話に敬語表現のきわめて少ない小説である。本稿筆者の一世代上のころまでは、神戸弁として勢力のあった「テヤ敬語」は、ここではわずかに次の例が得られたにすぎない。

視点人物の「私」(織元カオル)は、デザイナーで「ハイミスグループ」の一員である。

その明石に住んでいる姉が「きつとええとこ知ってはるよ」「唄うてはるねんて」とハル敬語を使うとともに、次のようにテヤ敬語も使っている。「義兄

の会社は姫路にある」とあるから、次の「いうとってやったから」は播州弁が入ったものと考えられよう。もっとも、昭和55年（1980）くらいなら、40歳代なら神戸にもまだテヤ敬語を使える人が少しは、いたであろう<sup>(注3)</sup>。

姉は片っぱしから言いかぶせて、

「また連絡するわ。そっちへいく用もある、いうとってやったから、そのうち機会つくって。ま、みなこれも縁のものやから」(354ページ)  
ほかに、「半分はあきらめとってや」「喜んどってやったわ」の例がある。

#### 4 「人情すきやき譚」・「波の上の自転車」

前者は初出が昭和60年『小説現代』、後者は初出が『別冊文藝春秋』昭和62年、同じころに書かれたもので、比較しやすいので、主要登場人物を男性と女性にわけて、表現を比べてみたい。

「人情すきやき譚」の尾上鶴治（夫）は41歳、古い老舗の紙問屋の長男として生まれ、「おっとり、とろんとした男」と一族から見られている。39歳で結婚し、武庫川沿いに自宅がある。現在はサラリーマン。若い頃は「わりに女の子にもてたほう」であった。

「ごめんな……怒らんといてや」(14. 田辺聖子全集149ページ)

「家まで送ったるわ」(150ページ)

「そんなん、してかまへんか」(150ページ)

「いやや、怖い」(150ページ)

「もっと薄味のほうがええけどな」(153ページ)

「卵焼きに砂糖入れるもんが、どこの世界におまっかいな。思ただけでも気色悪いがな」(153ページ)

「怒らんといてや」「かんにんしてや」など謝ることばが目立ち、「してかまへんか」「怖い」「ええけどな」「おまっかいな」など、いかにも気弱な物言いである。「……」が多いのも気弱な性格を表している。

次は「波の上の自転車」の村山（夫）、43歳ですぐカツとなる。会社は大阪にある。その部長。仕事が忙しく帰宅が遅い。阪神沿線で育ち阪神派。阪急では唯一、十三の町を庶民的な盛り場としてひいきしている。ただし、阪急派

の妻の主張が通って、阪急沿線の宝塚のマンションで住んでいる。両親は出屋敷町で小売商をしている。ふた月に三回ぐらい部下のゆかりの所へ通う。

（何ぬかしとんねん）（15. 田辺聖子全集230ページ）

（アホ<sup>ちや</sup>違うか、せっかく、気分よう飲んでたのに）（231ページ）

「死んだら、すべて無や、いうとんねん」（232ページ）

「アホか、オマエは。それ見さらせ」（232ページ）

（いや、実は会社の南野ゆかり、いう子オと仲良うてな、いや、誰にもいうてないけど、ホンマいうたら、オレ、それを生き<sup>が</sup>甲斐<sup>い</sup>に生きとんねん、ゆかりやったら、もし生まれかわったとき、添うてみてもエエなあ、<sup>おも</sup>思てんねん）（234ページ）

「しかし、オレの好きなのは、やっぱり阪神や無うて、この上町線、チンチン電車やなあ。これがほんまに好きになったよ」（242ページ）

心内語も含めて、「何ぬかしとんねん」「あほ違うか」「それ見さらせ」などと喧嘩言葉が入り、乱暴なことば使いである。その一方では、愛人に対しては、終助詞（感動助詞）「なあ」「な」「よ」をつかった、いつくしむような、精一杯やさしいことば使いをしている様子が、うかがわれる。

「人情すきやき譚」の女性では、まず令子（妻）があげられる。東京の小間物問屋の娘であった。お花（フラワーアレンジメント）の先生。鶴治とお見合い結婚。やや芸術家肌で少し現実離れしている。美人。鶴治の一つ年下。

「あなた。煮えたわよ」（146ページ）

「へんねえ、そのくせ、卵焼きにお砂糖入れないほうがいいっていったじゃない？」（153ページ）

「白味噌汁なんて悪夢じゃないかと思ったわ、あんな甘ったるいのを食べるくせに」（153ページ）

「じゃ、どうやってつくればいいんですかつ！」（156ページ）

理詰めで決め付ける東京式のはっきりした物言いで、関西で言うポンポン言うとかズケズケ言うとかいった話し方である。当人は普通に話しているつもりでも、相手は責めたてられているように感じるであろう。

人間にとって必要である以上に、白黒がハッキリした口の利きようである、と、そら恐ろしくなる。（147ページ）

などと東京と関西の言語行動を対比させながらの解説がいくつも挿入されていて、それが面白いのだがここでは割愛する。

百合枝（元恋人？）デパート店員だったときに、鶴治と出会う。顔が大きく腰まわりが太い。「関西女のおかめ型」で大阪女の典型。まったりとして、こせつかない。鶴治は結婚してよいつもりでいたが、彼の母親の反対で結婚できず、別れて子どもをおろしている。デパートを辞めてから神戸のニット会社に勤めたが、現在は大阪のミナミでブティックの店長を務めている。

「しゃアないなあ……」（149ページ）

「ふん。わかってる」（150ページ）

「いつも尾上サンの会社のあるビルの前通ってるねんよ」（162ページ）

「そないならへん。八、九年いうトコでしょう」（162ページ）

「ほんま？大きに」（163ページ）

「よう、いうてや。えらい口巧<sup>うも</sup>うなりはって」（163ページ）

「いまなにに凝<sup>こ</sup>ってはりますか、以<sup>ま</sup>前<sup>え</sup>にはいっしょに競馬に行ったこと、ありましたやろ。おほえてはりますか？」（163, 164ページ）

「いやあ、たよりない。五千円儲<sup>もう</sup>けて、御飯奢<sup>ごはん</sup>ってもらいましたやんか」（164ページ）

「しゃアない」は「しょうがない」、「ふん」は「はい」。いかにも大阪弁らしい大阪弁を使い、特に再会後の話ぶりは、柔らかくもたれかかってくるような、やや古風なまったりした趣きのはなしぶりである。

昔より、舌がなめらかな中年女になっていた。笑い顔も人あたりよく練れていい。

「ああ、しかし、なつかしいなあ。……」

と鶴治のいったのは、久しぶりに女らしい大阪弁を聞いた気がするからである。（163ページ）

次は「波の上の自転車」の女性で、万佐子（妻）38歳 若々しく、まだ美人といっても通りそうである。中学一年生の娘がおり、母親の常として娘べったりである。阪急沿線で育ち、沿線の女子学園を卒業。阪急沿線は上品で、阪神沿線はガラがわるいと固執する。

「今度うまれかわったら、よ。……ど<sup>ひと</sup>んな女と結婚したい？」（230ページ）

「具体的でなくてもええわ、タイプでいいなさいよ」(231ページ)

「あ、それ違うわよ。この頃の説は、やはりあるって。来世があるんですって」(232ページ)

「そんなはずないわよ」(233ページ)

「週刊誌に書いてあったもの、『死後の世界』っていうつづきものを読んだら」(233ページ)

「だってあの世でも結婚するし、生まれかわっても結婚するって。だからパパは……」(233ページ)

「ふん、阪神愛用者の身びいきね。阪急は窓から花の匂いがするわよ、阪神は煤煙ばいえんが入ってくるだけね」(237ページ)

「パパ、もうほちほち、おいたら？」(237ページ)

共通語風であるが、「ええわ」「ほちほち」といった口慣れた関西弁がついまざってしまう。論争していても、どこか感覚的で物言いが柔らかいのは、「人情すきやき譚」のチャキチャキの東京っ子の妻の物言いと対比させれば一目瞭然である。対称詞の「あなた」対「パパ」の違いもあるが。

南野ゆかり(愛人) 28歳 村山の課に働く。帝塚山の大きな家の離れを借りている。「年の締った」ハイ・ミスで堅気の勤め人。キビキビして明朗、よく働き、あたまもいい。姫松から阪堺電軌の上町線を利用して通っている。

〈どうぞ。そうしはったら？ あたしね、この部屋をはじめて見たときから、いつか、ここへ部長さんご案内しよう、ってきめてました。いつかは……って思ってたんです〉(241ページ)

〈怒りはる？そんなこと、ないですよねえ。あたしのこと、お嫌いじゃないはずよ〉(241ページ)

〈あたりき。部長さんは正直ですからね、すぐわかるんです。あたしは部長を好きだと思えますか、嫌っていると思えますか〉(241ページ)

〈ピンポーン！〉(241ページ)

「ここのおうちの人、急に転勤で帰って来はるみたい、秋には部屋を空けないと。——あたしもボチボチ、結婚相手、捜すかなあ」(243ページ)

ハル敬語をつかいながら、デスマス体を基本とし、「お嫌いじゃないはずよ」などと東京っばい女ことばをまぜる。謎かけをしながらの問いかけでやわらか

く、しかし「あたりき」「ピンポーン」などと幼さを感じさせることばを使って、可愛く甘えるような話の進め方をしている。

東京弁もふくめ、この二つの短編小説からも、田辺聖子の会話の表現のうまさ、多様で豊富なことばの使い分けが見えてきた。

## 5 『姥ときめき』

私＝歌子 七十七歳 船場で夫の死後、商店を切り回していた。ビルを建ててから、息子にあとをゆずって引退した。喜寿の祝いをすることになる。

昔、船場にいたころの女中の、お政<sup>まさ</sup>どんとおトキどんが喜寿の祝いに来る。

「ご寮人<sup>りょうん</sup>さんの喜寿のパーティーがでて、こんなうれしいことごあへん。どうぞして、米寿、白寿<sup>はくじゆ</sup>もお祝いしとうおますけど、ご寮人さんお丈夫なさかい、きっとでけますやろ」(16. 新潮文庫34ページ)

「まあ、ご寮人さん、花嫁御寮<sup>おま</sup>のようでおます。おきれいなことわいな」(36ページ)

「ご寮人さんお変わりごあへんか。しばらくご無沙汰しとりましたよって、何ぞお変わりあれへんやろか、思<sup>おも</sup>て、ご機嫌<sup>きげん</sup>うかがいでおます」(86ページ)

「へえ。ワテはいきまへんけど、あれも、よろしいもんだすなあ。」(88ページ)

船場ことばの「ごわす」が使われている。船場ことばらしからぬ「だす」<sup>(注4)</sup>がつかわれているのは、二人が「女中」という使われる身分にあったためであろうか。「一わいな」「けなるい」「おます」などの今では古い大阪弁が使われ、京都の「どす」「おす」にたいする大阪の「だす」「おます」という違いはあるものの、京都弁に近い柔らかさが感じられる。

## 6 『ベッドの思惑』

登場人物のうち、うどん安珍(「道昭」のあだ名)が 京都弁を使っている。父親が「丹波笹原」の寺のお住持(じゆつ)さんである。がっちりした体つきの若々しい坊さん。



うどん安珍は神妙に挨拶し、

「お口に<sup>お</sup>合うたらよろしおすけどなあ」

と京都弁だった。(17. 集英社文庫205ページ)

「そんなこと、おすかいな。あんたみたいなおきれいな方が」(221ページ)

〈ゆうべはちと冷えましたやろ、大事おへんどしたか〉(233ページ)

など「どす」「おす」を使ってのやわらかでやさしげな京都弁ではあるが、次の二作品に使われている京都弁ほどは微妙な女性的な感じがしないのは、この男の若さのためか、あるいは土地が京都からは遠く離れた所にあるためか。

## 7 「お手紙下さい」・「雪の降るまで」

「お手紙下さい」で女主人公の相手をする京都人は、越田という洋品店（雑貨屋ともある）の主人。隠居所を女主人公に貸している。小太りした背の低い50歳前後の男。妻は2年前に死んだという。

「北山通り、行ってみよか、思いますねんけど、一緒にどないどす。雨の晴れ間にちよいと。僕、車持ってきますし」

と家主の越田に誘われた。もっちゃりした言葉である。

この、語尾の「し」は京都弁独特のふしぎな言葉で、大阪弁の女ことばの助詞の「レィ」とは違うらしいと<sup>なずこ</sup>多珠子は察している。(18. 中公文庫57ページ)

「どないどす、あのウチの住み心地は。ご不便どっしゃろ」

と女のようにやさしい言葉でいう。(68ページ)

「そうかなー。おたく、ノイローゼ一歩手前みたいな顔しておいやしたよって、こら、あかんナ、ちと気鬱を散じはらなあかん、と、こない思いましたんやが」(68ページ)

「男の話どすか、そういうのはべつに申告義務はおへんよって、言わはらへんでもかめへんのどす」(84ページ)

「あ、本音いうたら、あきまへん。本音いわへんよってに、京都の町は千年から、つづいてるのどす」(92ページ)

「ええ雨どすな、飲み明かしまほ」(93ページ)

「まほ」は「まひょ（ましよ）」。女性的な京都弁で、相手をくどき込んで行くところは、蜘蛛が柔らかい糸をつかって獲物をからめ込んで行く様にも似ているとでも例えようか。小説では話の先を書いていないので、女主人公は事なく夜を明かすかもしれないが。

登場人物などが異なっている、まるで、この話の続編に当たるようなのが「雪の降るまで」。女主人公の相手の大庭は、51歳で京都の九条の材木業者。

〈そんなん、教養やない。ほんまの女の教養いうたら、あんたみたいに、あれが好き女のことどっちゃん〉(19, 角川文庫237ページ)

「大事な、ここ、何でもおそいねん。スロモーなうちなんや。ちょっと暖まらんと寒うて」(238ページ)

「今まではなあ。いまは以和子はんひとりや。何べんもいうておっちゃん」(248ページ)

「ここへ来たたら、万事ゆっくりせな、あかんのに、クセやなあ、つい、せかたらしに時計、見てまう」(248ページ)

「見とおみ……雪が降ってきたワ。さぶいと思た」(257ページ)

「(上略)先途、楽しみまひよなあ……」(259ページ)

「おすやん→おっちゃん」「どすやん→どっちゃん」「ましよ→まひょ」「しまう→まう」「おもうた→おもた」などの訛りというより音の変化が、どうもなまめかしく、やさしげである。こうしたくどき文句を抜粋していると、つい、この話の行き着くところに待つ性愛の場面まで妄想しそうになる。きついかか乱暴だとかいわれる神戸弁を母語とする本稿筆者としては、どうもキシヨクわろう！と思ってしまうそうになるが、この、くどきことばの内側に嵌まり込めば、あるいは退廃的かつ耽美的な快感状況にまで至るやも知れない。

京都弁については、もちろん女ことばの例も見られる。たとえば、「〔鞍馬天狗をくどく法〕(『田辺聖子全集3』)では、次のように若い娘たちの「一え」という女ことばが甘えかけるようで色っぽい。

「あれ見とうみ、あの、あそこに書いてあるお侍」

「何え、何ぞあったん？」

「あれが鞍馬天狗え。女みたいにきれいな男はんえ」(20, 田辺聖子全集446ページ)

しかし、すでに予定の紙幅も大きく越えているので、部分的ながら、田辺聖子の作品における関西弁の諸相をまずは俯瞰するという目的の、少なくともその端緒をつとめたものとして、いったん検討を終える。

## おわりに

田辺聖子の作品は、氏も何度か書いておられるように、関西を舞台としている。よって、会話には関西のことばが使われるのであるが、これが登場人物の年齢、職業、性格、地方などにより、実に多様に的確に使い分けられている。おそらく一般的な共通語による会話表現より、複雑微妙な使い分けがなされていると言えるであろう。

田辺氏自身が関西弁の話者かつ研究者であり、たとえば前出の『大阪おもしろ草子』などの研究的エッセーで大阪弁についての考察を進めている。安部牧郎の作品を分析して、

若い大阪女性の会話をうつつして阿部氏はまことに玄妙であると私は先に書いたことがあるが、このへんが心憎いところである。若い女の子の息づかいまで耳もとできこえそうな気がする。ちょっと気取って共通語を使うが、ラストの「へん」で、思考の構成や発想経路は大阪弁だということがわかるのである。(8. 田辺聖子全集641ページ)

他の作家の書いた小説についてここまで分析できる田辺氏は、さらに豊かに「玄妙に」表現行為を行っておられるのである。

分析と言っても、学者的な、死んだ形を腑分けするようなやり方ではなく、生きた体験に基づいて洞察したものであるところに、作品の創造の鍵があるのであろう。

この稿では、田辺聖子の文学作品に見られる大阪弁、神戸弁、播州弁、船場ことば、京都弁などについて、登場人物の年齢、職業、性格、性別などによる詳細な使い分けがみられることを示した。なお、同じ登場人物でも、年齢や状況の推移によって、言葉遣いが違って来る。個別に作品を取り上げて、さらに詳しく見て行くことも出来るであろう。

## 注

- (1) 田辺聖子自身の「解説」（『田辺聖子全集15』）に、「さて、私はいつも物語の舞台を大阪・関西に設定し、大阪人と大阪弁を活躍させるが、それは他地方に住んだことがないせいである。」とある。（523ページ）
- (2) 編集『田辺聖子全集』編集室『まいにち薔薇いろ 田辺聖子A to Z』2006年2月集英社刊所収「田辺短編の魅力」（菅 聡子）など。
- (3) 拙稿「神戸市におけるテヤ敬語の衰退」（『川口朗先生退職紀年文集』1989年5月『日本語文法の原理と教育』1997年和泉書院所収）参照。
- (4) 堀井令以知『上方ことば語源辞典』（1999年8月東京堂出版）に「ダスは幕末ごろから使われたが船場ではいわない」とある。また堀井令以知『大阪ことば辞典』（1995年5月東京堂出版）では、「大阪ではオマスを多く使用し、京都ではオスを用いる」とある。前田勇編『上方語源辞典』（1965年5月東京堂出版）の「おます」の項に「大阪船場では言わぬとの説もあれど、一概には断じ難い」とある。

## 田辺聖子著作資料（本稿引用順）

1. 「宇宙人のイモ」（『うつつを抜かして オトナの関係』文芸春秋1989年6月 文春文庫1992年6月所収）／2. 『薔薇の雨』中公文庫1992年6月「解説」永田萌／3. 田辺聖子「小説と大阪弁」「大阪春秋」2000年12月第101号／4. 対談「恋愛小説家の仕事」田辺聖子・川上弘美（「すばる」平成14年5月号所載 『田辺聖子全集 別巻』2006年8月所収による）／5. 文芸春秋「今夜も思い出し笑い」解説1988年5月（『性分でんねん』1989年9月刊行 ちくま文庫1993年5月所収）／6. 「感傷旅行」初出「航路」1963年8月（『田辺聖子全集5』2004年5月所収）／7. 『鏡をみてはいけません』1996年集英社刊 集英社文庫1999年9月／8. 『大阪弁おもしろ草子』講談社現代新書1985年9月『田辺聖子全集15』2005年5月／9. 『大阪弁ちゃらんぼらん』1978年6月筑摩書房刊 中公文庫1981年8月／10. 「すべってころんで」1972年5月朝日新聞社刊 『田辺聖子全集3』2004年11月／11. 『芋たこ長電話』1980年11月文芸春秋刊 文春文庫1984年10月／12. 『性分<sup>しょうぶん</sup>でんねん』1988年9月筑摩書房刊 ちくま文庫1993年5月／13. 『ダンスと空想』1983年12月文芸春秋刊 文春文庫1986年4月／14. 「人情すきやき譚」初出1985年2月「小説現代」『田辺聖子全集5』2004年5月／15. 「波の上の自転車」初出1987年7月「別冊文芸春秋」『田辺聖子全集5』／16. 『姥ときめき』1984年5月新潮社刊 新潮文庫1987年7月／17. 『ベッドの思惑』1985年3月 実業之日本社刊 1989年5月集英社文庫／18. 「お手紙ください」（『薔薇の雨』1989年9月中央公論社刊 1992年中公文庫刊）／19. 「雪の降るまで」（『ジョゼと虎と魚たち』角川文庫1987年1月）／20. 「鞍馬天狗をくどく法」初出1982年5月「小説現代」『田辺聖子全集3』